
ONE PIECE 一繋ぎの大秘宝と世界の歴史

丘田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 一撃ぎの大秘宝と世界の歴史

【Nコード】

N8319Z

【作者名】

丘田

【あらすじ】

注意

主人公シート仕様です。

一話 オハラへ(前書き)

チート系が嫌いな方はバツクで

一話 オハラへ

始まりはたった一人の異人であった。持っている力に特別なものはなく、彼が誇れるものは努力で培った力。

物心ついたとき、いや、それよりも前から彼は本を読んで勉強し、体力の回復次第暴れ、暴食の如く食べた。

その様子に両親は奇怪な目で見ていた。しかし、それと同時に自分の子が普通の存在ではないと実感し始めた。

齢四つになる頃には一人前の大の大人と変わらぬ程の力持ちになり、誕生日に欲しがっていた木刀を振り回すようになった。それは参考にするのは全て本からの知識であり、それは忠実に行ってきた。普通の人ならば本から得た知識で鍛えても、せいぜい本の作者と同等にしかねない。しかし、彼はいくつもの文面から組み合わせた方法で原典を超える成果を成し遂げる。

齢五つになった次の日、彼は愛用の木刀で岩を砕いた。その次の日には村人が全員気絶する珍事件が発生した。

そして、齢六つするとき、彼は旅立った。まだ海賊王ゴールド「ロジャー」、いや、ゴールド「D」ロジャーが海賊王になり、処刑されて間もない大海賊時代。

だから、バスターコールを止めにした一人でおハラへ足を運んだ。自らの手の届く悲劇に目をつむることはできなかった。

自慢の頭を使い、そして海楼石仕様一人用小型ボートを作り出し、海を越えて行く。

二話 バスターコール

海上を200キロで進むボートに追いつける海軍も海賊もおらず、オハラに入ると既にバスターコールが始まっていた。

「ち、もうかよ。」

「誰だ？」

近くの海軍船に乗る一人に見つかってしまった。

「仕方ない。せつかく作つたが捨てるか。」

どうせまた作れるからこつちに大砲が向く前に乗り捨てた。

「まずは民間船を赤犬から守るか。」

赤犬の乗る船は大方目星をつけて俺は民間人に紛れて民間船に乗る。

オルビア？後で助けますよ。

「来たか…」

赤犬の乗る船からこの民間船に向けて大砲が撃たれた。だが、俺はその大砲に向かって刀を抜いた。

砲弾はもちろん相手側の大砲を真っ二つに裂いてやった。

さらに覇気込めなため、とどまることを知らない斬撃は赤犬の船を真っ二つにした。

乗船員の方々、何人か殺してすまない。

「出て来たか…」

「誰じゃ？」

そう言って返答の無いまま進む船に痺れを切らした赤犬は溶岩の手を放つ。

俺は赤犬の拳を覇気込めのショットガンで粉碎する。

「何じゃと？」

「これで止まれ。」

覇気込めライフルで赤犬の脇腹を貫く。呻いた赤犬に追い打ちをかけるように右肩と左の膝の皿を撃ち抜いた。初速マツハ6まで出せるように設計したライフルは反動クッションを超えてかなりの反動がある。覇気を体に込めなければ相当なダメージを負うことになる。

「大したこと無いな。武装色の覇気の才能に感謝だ。」

まだ立ち上がるうとする赤犬にとどめに左足の指先を撃ち抜いた。あれは痛いだろうな。あまりにグロすぎて目を背けたくなる。やったの俺ですけど…

「さてと、行くか…ニコ・オルビアを助けに…」

少年移動中。

「おい、少し失礼。」

言い終わる頃にはオルビアを捕らえていたどっかのザコ2人とさらにザコなスパンダインごと倒しておいた。

「貴方は？」

「さあな、早く娘を追っぞ。」

帰りがけに捕らえられていた学者一同を助ける。するとロビンが現れた。オルビアは彼女と抱擁を交わすがすぐにサウロが現れ、逃げるように皆を説得する。

俺は歴史の本を取り戻そうとする学者に殺気を放逃げることを優先させる。

「ところで、お前さんは誰なんだ？」

「そうだな…アルと呼んでくれ。すまないが本名では無いがな。」

「あら？私が聞いた時には答えてくれなかったのに…」

「…本名は………だ。」

「良い名前ね。」

「そうか、ありがとう。さてと、サウロ。先に行け。」

「どうしたんだ？」

「中将か、クザン。」

進行方向に海軍中将クザンが待ち構えていた。

「悪いが逃がす訳にはいかっ？」

「お前は俺が相手をしよう。」

「覇気か？この歳で？」

クザンは驚いて臨戦体制に入る。子どもと油断していたクザンも気を引き締めたが少し遅かったようだ。

「残念だったな。」

素早く取り出したライフル”メタルイーター”でクザンの両肩を撃ち抜く。

おそらく赤犬から忠告はされているだろうが素早くは対応できなかったみたいで両腕を封じさせてもらった。

「殺しはしないが、重症にはなってもらっぞ。」

とは言え中将故にそう簡単に倒させてはもらえないのはわかってい

る。まずは覇気込めバズーカで吹き飛ばしておいた。

吹き飛んでいる煙の中にいるクザンをライフルで撃ち抜く。両膝の皿は粉碎させてもらった。さらに左脇腹に一発入れる。

「剃ソル？」

「残念だ。」

「剃ソルだと？」

抜き足だが言わないでいいだろう。

「そろそろ終わりでもいいだろ。」

重症を負ったクザンに追い打ちをかけるように太ももと腹に計三発打ち込んだ。

「アイ…ス…」

「じゃあな。」

膝をついていたクザンの顔面に抜き足の速度でパンチを放って終わらせた。

俺はクザンが起きないのを確認した後、ロビン達を追うことにした。

二話 バスターコール（後書き）

禁書よりメタルイーターの名前を借りました。性能は違います。

三話 隠れ家

即席で用意したボートで改造させながら民間船に追いついた。サウロに演説させてバスターコールの実態を教え、オハラ出身とは言わないように確約させた。もちろん反論はあった。故郷に誇りを持つなら死ぬ覚悟をしるただけ伝えた。しかし、オハラ出身を誇ることはそれ以外のオハラ出身者を危険にさせる。そのことは念頭に理解させておいたが、どの世界にもあぶれるものはいるし、誰もが心が広い訳ではない。考古学者に恨みを持つものは多い。学者たちには先立って隠れなければならぬことを教えていた。

もちろん学者達からも反対する奴は出てきた。なんか途中から嫌になつてきたが、説得はある程度してから一応隠れ家は用意した。考古学者と民間人には伝えるところは違ふ。何故かと言えば、数日後に明らかになるが、考古学者の隠れ家を海軍に教えて多額の金をせしめようとする輩が現れた。残念ながら偽りの情報提示に加え、オハラ出身ということ、そいつはお亡くなりになった。

学者の中にもオルビアに対して不満を持つ奴も多く、多くの歴史の本を失つてからは考古学者の道を捨て密告者となることもあった。俺とサウロで何とか凌いできたが、徐々に守りきれなくなり、数人が命を落とした。そうなつてくると、さらに密告するものが増えて終には12人にまで減つた。

「人つてなんて意地汚いのかしら…」

「十人十色、みんながみんな同じじゃない。善人の数だけ悪人がいるんだよ。人の不幸が好きなキチガイもいるさ。」

「何で私は貴方みたいな小さい子に諭されているのだろう…」

「知るか。」

オルビアとくだらない話をした後、次の隠れ家を地図で何処にするかを考える。

「サウロを呼んでくれないか？」

「わかったわ。」

オルビアはサウロを呼ぶために部屋から出て行く。俺は思案を重ね、次の新天地へと進むことにした。

見聞色の覇気からわかる最後の裏切り者、ドルトンを騙す為に…

次の日、伝えた場所とは違う場所を最初から目指した。ドルトンは何度も航海の方向を聞いてきたがすべて適当に流した。着いた場所はイーストブルーのとある島である。

「ここって最初目指してた場所と違わないかしら？」

オルビアが話しかけてくるとドルトンはこちらに耳を傾けてきた。

「そうだ。裏切り者がいたみたいだしな。海軍本部に仕掛けておいた盗聴器で次行くところがばれていたしな。」

オルビアは表情を変えた。

「誰かしら、その裏切り者は？」

「さあな。お前らならわかるだろう？」

アリバイが無かったのはドルトンを含めて四人。しかし、今日は誰も自供しなかった。そのままの生活を一週間、ドルトンはストレスから自供した。言っても怒らないというのは自白をさせるための都合のいい言葉にすぎない。これで残りは11人だが、もう、減ることとは無いだろう。カームベルトを越えられるとは海軍も思わないだろう。

しかし、この目論見は甘かった。海軍に俺の作ったボートを回収されていた。ある日近くの街に資源や食糧を買いに行ったときに海軍がニコ・オルビアの行方を探しているのがわかったからだ。

俺は隠れ家に帰るとすぐにそれを知らせ、しばらくは近海でも出てはならず、サウロが仕留める海王類を非常時に食べると指示し、俺は海軍本部に乗り込みボートを探した。見つけるのに数日掛かったが、Dr・ベガパンクに解析される前にボートを回収できてよかった。

海軍本部からボートを回収し、裏から抜け出す。グランドライン前半はノースブルーとイーストブルーに囲まれているため、すぐに横にそってイーストブルーに入る。

「これは…？」

ボートの中には一つの紙が挟んであった。これはビブルカードであり、Dr・と書かれてあった。おそらくベガパンクへの解析依頼だったのかもしれない。技術を盗まれてはならないため、回収できて本当によかった。もしかしたら手遅れかもしれないが、おそらく大丈夫だろう。

「けど、フラグなんだな…」

背後には同じボートがつけていた。やはりDr・ベガパンクに解析されていた。

「ボルサリーノかよ…だけど、一対一なら負けはしない！」

「うーん、君があのおの2人を倒したのかい？」

「ああ、アルだ。手配書の手配でもしておくのだな。」

「その必要はないよ、ここで捕まえるからね。」

油断はしてくれない。この時点で大将では無いが、中將ではあるみたいだ。

「それより聞きたいんだけどさ、このボート何処で手に入れたんだい？」

「ベガパンクが作った。」

「それは知ってるよ。でもね、君が最初に持っていたボートは彼が作ったものじゃないんだよね。」

「空島にでも行くんだな。」

「弱ったね。それは残念だね。でも、嘘かもしれないしね。」

「そうだな。じゃあ、始めますか。」

「子どもだからって油断しないよ。」

ボルサリーノは臨戦体制から初動でいきなり顔に蹴りを放ってきた。

四話 海上戦（前書き）

時系列のミスが著しかったため、すべて直しておきます。

四話 海上戦

すでにピカピカの実を食べていたのだろうボルサリーノの一撃は避けられるものではなかった。腕のガードは間に合ったがそのまま海に弾かれる。

「ゲッポウ月歩」

「うん?...君、おかしいね。」

ボルサリーノは俺が目と鼻の先である。ボートの先に降りるのを待っていた。

「どうして月歩を使えるんだい？」

「いくら隠されている情報と言えど伝わるものは伝わる。後は独学かな。」

「参ったね。それじゃ他のも？」

「六式は使えるが、剃は必要ないからあまり使わない。」

「ふん。」

納得した瞬間、光の蹴りを放ってくる。俺は抜き足で攻撃してくるボルサリーノの背後に回る。ピカピカの実と言えど本当の高速にはなれない。だが、その程度の早さであれば距離が短いときなら速さで負けはしない。

「嵐脚？」

「天叢雲劍？」
あまのむらぐも

「六王銃？」
ロウオウガン

ボルサリーノは六王銃を真正面から受けて吹き飛ばすがピカピカの実の能力で元の自分の乗ってきたボートに戻る。

「何かな？その技は…」

「六式を極めれば自ずとたどり着く必殺技だよ。」

ロブ・ルッチが使うまで六王銃はまだ存在しなかったみたいだ。

「困ったね、海軍の六式使いでもそこまで強くは無いつてことかな？」

「まあな、俺の方が強いってことだ。」

才能というのは遺伝に加え、幼少期の行動で決まるようなものだ。それも若ければ若いほど、つまり幼ければ幼いほど、大方三歳くらいで決まるとも言われているのだ。俺はその以前から自我が画一されていたのだ。しかもルフィは五歳から地獄の特訓をしていた。つまり、それを入れてもおそらくこの世界では七歳くらいで才能が決まるのだろう。

「君は五、六歳でしょう？」

「まあな、残念ながら0歳から鍛えているんだがな。それと六歳だ。」

力比べなら二年前から大人と遜色ないほどにはなったがな。」

「本当に君は怖いよ。ここで芽を摘んでおかないとね。」

「紙絵……」

「おや？また避けられちゃったね。」

ボルサリーノはいきなり蹴りを放ってきたが、見聞色の覇気で先読みして避けた。

「見聞色もあるんだね。」

「霸王もな？」

霸王色の覇気を浴びせて怯んだボルサリーノに六王銃を本気で放つ。ガードに回ったボルサリーノも受け止めたはいいが、海上戦ゆえボートから落ちないようにするためにその場ですべての威力を受け切るしかない。

受け流そうにも先の一撃の倍ほどの威力を持つ六王銃をもらえば意識が飛ぶ可能性もある。そこで海に落ちれば海王類の餌だ。

「ぐう……」

ボルサリーノはボートの上に倒れて意識を失った。俺はボルサリーノのボートが海楼石仕様であることを確認して、一番近い島の方角に向けて発進させた。しかし、俺は海軍中將を甘くみていた。ボートが発進して俺も反対の方へ向けて隠れ家に向かおうとしたとき、ピーという機械音が聞こえた。

おそらく俺がボルサリーノの最初の一撃で吹き飛ばされたときにし

かけられたのだろう。ボルサリーノと一定距離の長さが開いたときに発動する仕組みだったらしい。目測でボルサリーノとは直線距離で三キロほど、つまり半径三キロは吹き飛ばせる爆弾だったみたいだ。

俺は爆弾を刺激せず、素早く海に潜った。次の瞬間恐ろしい爆発に身を包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8319z/>

ONE PIECE 一撃の大秘宝と世界の歴史

2011年12月28日01時58分発行